

研 究 分 野	資源生態	部 名	漁業開発部
研 究 課 題 名	沿岸漁場整備開発調査 ウスメバル増殖試験		
予 算 区 分	水産基盤整備事業費		
試験研究実施年度・研究期間	H. 1 1 ～ H. 1 7		
担 当	吉田 雅範		
協 力 ・ 分 担 関 係	青森市水産指導センター		

〈目的〉

陸奥湾内に着底したウスメバル稚魚の生態を把握することにより、漁獲対象資源であるウスメバルにはたす陸奥湾の役割を解明し、今後のウスメバル資源の保護及び増大についての知見を得ることを目的とする。

〈試験研究方法〉

2004年に青森県水産総合研究センター増養殖研究所で種苗生産し、青森市水産指導センターで中間育成したウスメバル幼魚に標識を装着し、2005年6月20日に脇野沢村人工礁周辺水深約60mで船上放流した（表1）。

表1 標識放流結果

放流月日	2005/6/20
放流場所	脇野沢村人工礁周辺
現場水深	60m
放流方法	船上放流
放流尾数	491
平均TL	131mm
標識種類	スパゲティタグ 18mm
色	黄色
刻印	7才200

〈結果の概要・要約〉

これまでの各年の放流群について、放流後20日以内に放流地点周辺で再捕されたものを除いた放流と再捕の位置関係を示した（図1）。春季に陸奥湾奥部に放流されたウスメバル幼魚は、秋季から冬季にかけて津軽半島東岸を湾口方向へと移動し、約1年後となる翌春には湾口部周辺へ到達すると推察されており、データ追加後も同様の結果が推測された。

日本海周辺及び陸奥湾のウスメバルはほぼ均質な遺伝的組成を持っていること、陸奥湾にウスメバル親魚が生息しないこと等から、陸奥湾のウスメバルは日本海起源であり、陸奥湾で未成魚期を過ごしたウスメバルは陸奥湾の高水温（秋季）及び低水温（冬季）がきっかけとなり、湾奥から湾口へ、さらに湾外へ逃避移動するものと考えられている。

しかし、今回放流後2～3年経過した個体が放流地点で再捕されたため、湾口部に移動したウスメバルの中には湾外へ移動せずに根付く個体もあると考えられる。ただし、今回再捕した4才魚の全長は16.8及び18.5cmと標準的な青森県の4年魚より小型であったため、成長不良により湾外への移動が遅れたとも考えられる。

〈主要成果の具体的なデータ〉

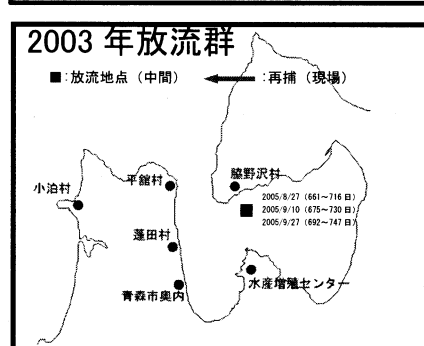
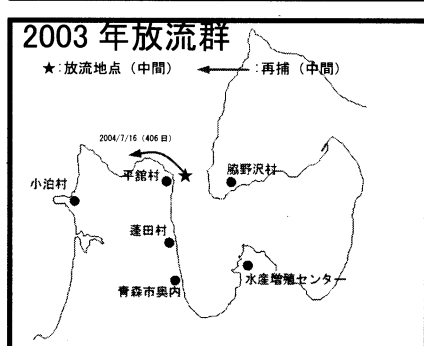
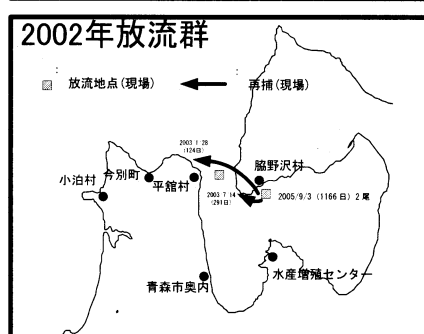
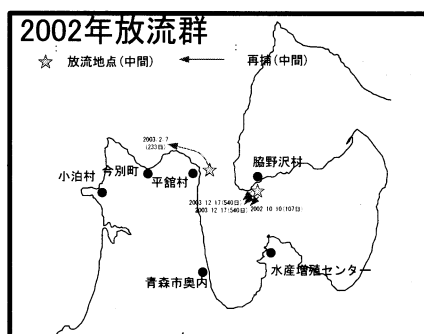
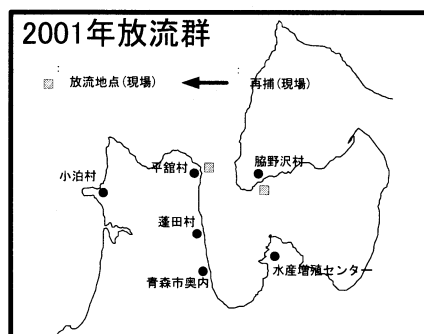
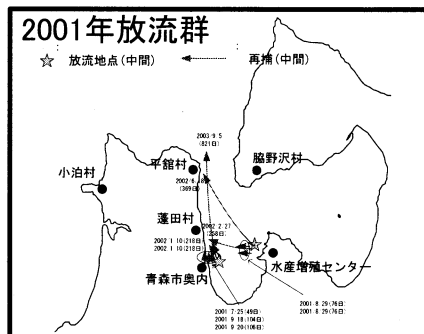
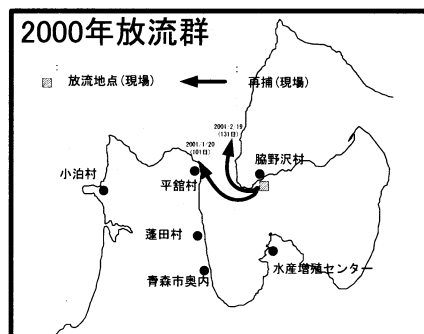
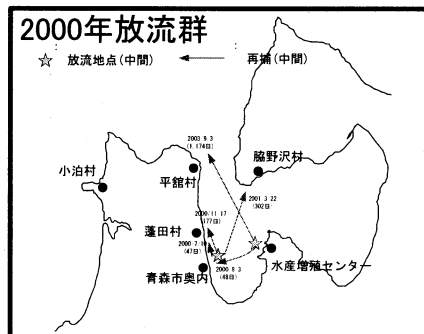


図1 放流と再捕との関係(放流後20日以内の再捕例を除く)

※図中の年月日は再捕年月日、()内は再捕までの日数

〈今後の問題点〉

- ・本県ウスメバル資源の主体をなす日本海の資源との関係についての検討。

〈次年度の具体的計画〉

なし

〈結果の発表・活用状況等〉

- ・水産基盤整備事業の事業計画策定のための資料として活用。